

長谷博子さん証言（2009年2月）

私は、終戦日には長野県篠ノ井町通明国民小学校2年生8歳だった。家族は軍人（陸軍少佐）と母の両親、祖父母、兄弟3人の7人世帯であった。1945年に、父の転勤の関係で家族は千葉市椿森を離れて長野県に移住していた。父は、長野県松代の大本營地下壕建設に従事していたと想像しているが、家族には一切話さなかった。お寺の一角の長屋に住んでいた。私は、終戦の放送を知らないでいた。家族で千葉に戻るときに戦争が終わったことを知らされた。長屋にいたとき、隣の東京から来た家族はしばしば喧嘩をしていたが、親の話によると食べ物の中で本気になって喧嘩をしていたらしい。喧嘩の声を聞くのは、とてもいやだった。私の家は、父が高級軍人だったから、戦時中いろいろ優遇されていたのだと思う。長野県の人には疎開の人に対しても優しく、人情が熱いと自分も体験したが、それでも他県から来た人は食べ物に不自由していた。富山から来ていた女性は、食料が不足するので母乳も出なくなって困っていた。ある日、杏の実がなっていたので、家族でおなか一杯食べたところ、おなかの具合が悪くなった。土地の人に食べ過ぎだと笑われたが、ひもじかったのである。長野県の桑畑やりんご畑にもアメリカ軍の艦載機が農村の人々に機銃掃射を浴びせた。私は直接艦載機に遭遇しなかったが、地元の人たちが機銃掃射の恐ろしさを語っていた。もはや軍事施設が攻撃対象でなく、非戦闘員の日本人が攻撃の対象であった。日本軍も外国で同じことをやっていたに違いない。

私の母は干支（えと）が「五黄の寅」と言っても運の強い干支で、36年に一度しかその寅年は巡ってこないで、出征兵士の持つて行く千人針にはたくさんの赤い糸の玉を作ってあげられた。他の人は1人一つであった。そして、白い割烹着を着て国防婦人会のタスキをかけて出かけていた。ところが、戦後の母の感想は、「畑でスイカを作って、それをすぐ割って青空の下で食べているほうがずっと私に合っていた」そうだ。母は女学校も行かず、和裁学校に行った母には、軍人夫人は窮屈だったに違いない。私は母の手伝いとして、お米、塩、醤油、タバコ、酒の配給を並んで買った。タバコはきざんだタバコが配給になり、父は自宅で辞書の紙を巻いた紙タバコを吸っていた。

長野県の学校生活で記憶している事件は、ある日、天皇が乗った列車が、近くを通過するので、全校生徒約千人が線路脇に立って整列させられた。もちろん、授業は中止しての話である。私は、天皇がどこにいるのかわからなかった。

長野県に移住する前の時代は、千葉市椿森にいた。父は陸軍気球隊、陸軍兵器廠に勤務していた。仕事は主計のようである。出勤時は、家に部下の兵隊がサイドカーで迎えに来た。父は軍服に長靴（ちょうか）にサーベル（日本刀かもしれない）姿で出勤していた。父は決して威張る軍人ではなかった。部下にも家でご馳走を振舞っていた。部下も上官に当たる父の家族に、燃料の薪を縁の下に運び入れていた。長野転勤後、すぐに父が腸チフスにかかり、長野日赤病院に2ヶ月入院した事件があったが、その際、隣のベッドにいた善光寺前の風呂屋主人と懇意になり、退院後もなかよくしていた。父は優しい性格であったと思う。戦後、父は公職追放に会い、家族や知人に戦争のことを誰にも話さなかった。私も父に戦争の話は聞かなかった。父と口論したのは、私が千葉銀行で労働組合を知り、

運動を始めたとき、父は反対した。「お前がしなくてもよい」と言う論法であった。母も父に同調した。私は労働組合活動を通して目を開かせられていたので、労働組合は辞めなかった。もう、成長した私に対して、父は黙っていた。もっと、父とよく話せばよかったと思う。

1944年、1年生のときは千葉市院内国民学校に通った。1クラスは58人であった。学校には、奉安殿があった。このことは関心がなかったので、余り覚えていない。ただ、よく全生徒が講堂に集められ、天皇の写真（これを当時、御真影と呼んだ）の前で最敬礼をさせられた。授業で「ススメ、ススメ、ヘイタイ、ススメ」を教えられた。その後、一時期、1人で成田へ縁故学童疎開をした。その家では、叔父とその離れに住んでいた甥が出征していた。甥は戦死したので、甥の黒枠写真は天皇の写真と並べて飾られていた。叔父は結局不明で、戦死したと思われる。親戚の家には娘が3人いたが、いずれも私より年下でいじめはなかった。むしろ、家族を離れて、他人の家に住んでいる私こそ、寂しいので彼女らに辛くあたった。後で、成長した彼女らに謝ったが、覚えていないと言ってくれた。

戦後、千葉市椿森に戻りたかったが、1945年7月7日の千葉市大空襲で家は焼けていたので、千葉市若松町の母方の家にお世話になった。この家の戸主の叔父は戦死しており、祖父母と未亡人となった叔母と私と1歳違いの男子が農業をしていた。その家は牛も飼っている農家であった。父母は、千葉市都賀の畑を貸してもらって農業をやった。麦、西瓜等を作った。公職追放中の父はもともと農家出身の次男坊であったので農業は自信があった。両親で作物を収穫した。母がリヤカーで行商した。また母は古着を斡旋してもらい、お針の腕も生かして、農家をあてに行商をしていた。母にとって、戦前は軍人の妻として比較的楽な生活であったが、戦後の生活は一転して大変だった。戦後、双子の子どもが生まれ、9人家族となった。

戦後、食糧事情は極めて悪く、配給食糧はくず粉、コウリヤン、芋でんぷん、殻入りフスマ、芋の粉（煮ると黒い色になった）等であった。家では、これらに膨らし粉を混ぜてパン焼き器で調理した。たんぱく質は近所でザリガニをとったり、鶏をつぶしたりした。自分で飼っている鶏をつぶすと、それ以来、鶏肉は食べられなくなる友もいた。

4年生の記念撮影は鉄道連隊兵舎を利用した千葉陸軍病院を背にしている。子どもたちは、足袋、下駄、草履、モンペ姿も多い。当時は靴もなかった。私は6年生になってようやく院内小学校の教室に入れた。それまでは轟の現在経済高校になっている場所にあった兵舎を利用した教室にいた。そのとき、登校途中、千葉競輪場が囚人たちの手で建設中であったが、先生は囚人を見ないように注意した。その後、父の勧めで、算盤・簿記を習得するために女子経済高校付属中学校に入学したが、学費を払うことが出来なくなり、中学2年生2学期より千葉市立椿森中学校に転校して、同校を卒業した。このとき、旧制の学制から6.3.3制の学制に切り替わった。私は新制千葉女子第二高校に進学できた。

後に千葉市議会議員となった千葉通子さんとは小学校・中学校は同期である。私は高校卒業後に千葉銀行に就職したが、彼女は、空襲で家が焼け、中学校卒業して千葉銀行に入行して、夜間高校に通っていた。優秀だと思う。

私は千葉市大空襲を知らないが、父が長野県から千葉に出張したときに偶然にも、千葉

空襲に遭遇した。父は椿森の自宅の防空壕に避難したが、眼鏡が吹っ飛んだらしい。

戦争はどんな理由があっても、絶対ダメだ。何もプラスにならない。戦争は、天災ではないのだ。阻止することはできるはずで、私達は二度と戦争を起こしてはいけないし、そうするために行動しよう。若い人には、昔は全て国のためにであったが、今は自分で何か目標を立てて、その実現もめざす夢があるから、がんばって欲しいと思う。